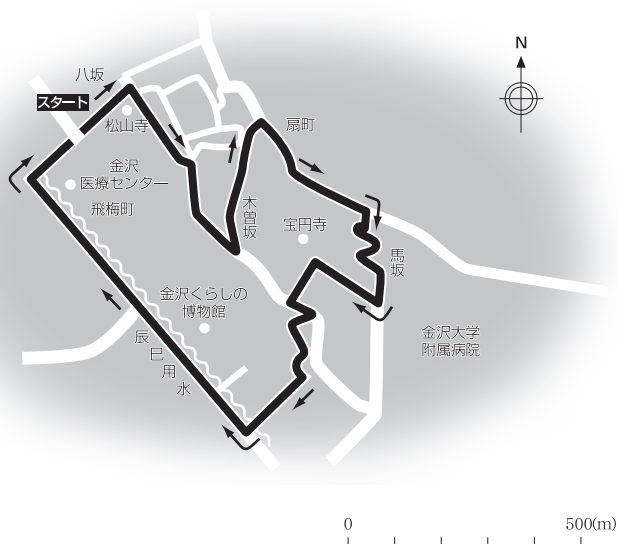


八坂・馬坂コース

緑が語る台地の歴史「水の流れと人が行き交う坂のまち」

台地が大きく浸食され、起伏に富んだ地形が続く。そんな自然環境が古くから育んできた坂、用水、わき水などが残る界隈には今も先人たちが坂を歩き、水で潤い、憩いの時を過ごした息づかいが聞こえてくるようです。

八坂 → 木曾坂 → 馬坂 → 宝円寺 → 金沢くらしの博物館 →
辰巳用水 → 飛梅町・下石引町



●八坂

「歴史のまちしるべ」にはこう記されています。「昔、付近に木こりが通う八つの坂があったのでこの名がついた」。金沢医療センターの横から東兼六町へ下りるこの坂は、かなりの急坂です。眼下には、卯辰山を背景として、家々の藁が光輝く情景は、懐かしい金沢のまちなみを色濃く残しています。

●台地斜面の寺院群

八坂の下、右に進むと苔むした石積み塀が続き、小立野台地の深い樹影を借景とした松山寺、鶴林寺、雲竜寺が並び建ちます。山門まで長い石段が築かれている様は、山寺の情景を彷彿とさせます。特に松山寺境内に凛々しくそびえ立つ2本のモミの大木は、山門を大きくしのいでいます。

●木曾坂

寺院群近くを流れる源太郎川に沿って長い坂が続きます。途中、左に折れ、木曾坂を上ります。木曾の山中を思わせる幽すいなどころであることから、この名がつけられた坂の界限は、小立野台地から流れる小河川により浸食され、市内では珍しい谷あいの地形で、右の崖地にはスギの大木や深々とした竹林などがみられ、坂を挟んで左の源太郎川の豊かな流れと澄んだ水音が、溪谷の風情に彩りを添えています。

坂上の高台に着くと、次は斜面を一気に下る石段があらわれます。時が過去に遡ったかのような古い面影を残した坂道で、下りきったところが扇町で、天神町へと続くまちなみに沿って馬坂の上り口へと進みます。

●馬坂

馬坂は、かつて農民が馬を引いて上った道。坂を上りながらまちなみを俯瞰してみると、卯辰山をはじめ遠くは内灘方面まで遠望できます。途中、馬坂不動寺が鎮座し、竜頭の笥から細く、長くこぼれ出る清水は、崖地からしみ出るわき水です。

●宝円寺

前田家の菩提寺として知られる宝円寺。境内にはケヤキ、ボダイジュなどの大木があり、きれいに手入れがされています。山門を出て右にまわり、急な石段を下り再び坂を上ります。源太郎川があらわれたら右に見える狭い階段を登り、小路を進むと小立野通りです。

●金沢くらしの博物館

博物館として使われている建物は、明治32年(1899)に旧金沢第二中学校として建てられました。屋根に三つの尖塔があることから三尖塔校舎の愛称で、今も親しまれています。博物館がある紫錦台中学校の敷地内には、枝ぶりが華

麗なアカマツのほか、白梅、トベラ、ツガなど種々の樹木が点在し、生徒たちによって名札がつけられていて、木々を観察するうえでとても参考になります。

●辰巳用水

用水のまち金沢。金沢くらしの博物館前を辰巳用水が流れています。この用水は、三代藩主前田利常が、寛永9年(1632)に板屋兵四郎に設計させたものです。犀川上流の上辰巳町で取水し、導水トンネルを通り、5.2kmの開水路で兼六園に入ります。霞ヶ池に一旦貯水し、ここから地下導水石管を使って金沢城の二ノ丸へ揚水しました。延長約11kmにもなります。

辰巳用水は、低地から高地に水を引き上げる逆サイフォン工法を用いていることや、地下導水石管の技術レベルの高さは、日本の土木技術史上においても重要なものといえるでしょう。

●飛梅町・下石引町かいわい

この界隈は、昭和39年の住居表示の実施により「石引3丁目」に町名変更となりましたが、平成12年4月「飛梅町」・「下石引町」の町名が復活しました。

飛梅町の由来は、この地に加賀八家の一つ前田対馬守長種にはじまる藩の老臣一万八千石前田氏の下屋敷があったところで、同家の家紋の「角の内梅輪」にちなんで名付けられました。「飛梅」といえば、福岡県太宰府天満宮の祭神・菅原道真ゆかりのご神木の飛梅が知られていますが、平成18年には、復活した町名が縁で、太宰府天満宮から太宰府の梅苗が金沢市に贈られ、金沢くらしの博物館敷地内に植樹されました。また、下石引町は、金沢城の石垣を築くため、戸室山から切り出した戸室石を引いて運んだみちすじがあったことから、この名がつけました。

県有形文化財「三尖塔校舎」や市指定保存建造物「旧ウィン館」などが建ち並び、学校も多く、児童・生徒たちがバスを待つ光景をよく目にします。飛梅町・下石引町は、まちに新たな歴史を刻んだのです。



(八坂)